

# 福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	基礎看護学部門における人材育成および基礎看護学の専門性の追究に関する取り組みとその評価：学術活動
Author(s)	黒田, るみ; 佐藤, 博子; 丸山, 育子; 川島, 理恵; 林, 紋美; 蓬田, 美保; 須賀原, 舞
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 25: 53-57
Issue Date	2023-03
URL	<a href="http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1986">http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1986</a>
Rights	© 2023 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-05-04T17:08:47Z

## 学 術 活 動

## 基礎看護学部門における人材育成および 基礎看護学の専門性の追究に関する取り組みとその評価

黒田 るみ（基礎看護学部門）  
 佐藤 博子（基礎看護学部門）  
 丸山 育子（基礎看護学部門）  
 川島 理恵（基礎看護学部門）  
 林 紋美（基礎看護学部門）  
 蓬田 美保（基礎看護学部門）  
 須賀原 舞（基礎看護学部門）

### はじめに

筆者が本校看護学部基礎看護学部門の責任者として赴任し、2022年度で2年目になる。このような管理を担当する立場の者に必要とされることについて、20数年前、恩師の薄井坦子氏に尋ねたことがある。その当時、薄井氏は宮崎県立看護大学の学長であった。一方の筆者は、常勤の大学教員として、大学院の看護理論および看護倫理に関する授業の一部を担当することになったばかりであった。筆者はそれまで教育をする立場を意識して大学院の授業に参加したことがなかったため、教員として大学院のゼミをどのように進めたら良いのかを改めて確認したいと思い、週に1回程度、半年ほど宮崎県立看護大学に行き、間近で恩師のゼミの進め方を拝見した。教育が展開される実際の現場に身を置いて学ぶ中で、筆者はゼミの進め方以上に、ゼミの前後や休憩時間の、何気ない会話の中で発せられた薄井氏の言葉からも多くの示唆を受けた。

筆者の質問に対する薄井氏の返答は、「Vision が描けるかどうかよ」というものであった。その時筆者は、「描けなければ断った方がいいんですか？」とバカなことをさらに尋ねた。薄井氏は呆れたようにこちらを見て、「そりゃそうよ。その組織を路頭に迷わすつもり？」と話された。それ以降、筆者は管理的な立場で判断を迫られる

時には、「Vision を描けているか、描いている Vision は何か、描けなければみんなが路頭に迷う」と考えるようになった。本稿では、この2年間、基礎看護学部門の仲間と共に模索してきた本部門の人材育成と基礎看護学の専門性の追究に関する Vision とその取り組みを振り返り、報告したい。

### I. 2021年度・2022年度の基礎看護学部門の活動目標と2021年度の評価

竹之下理事長兼学長の2021年度の新規採用職員へのあいさつを踏まえ、筆者は以下の4つの活動目標を提案した。その後、2021年度の評価について、部門内で共有した内容の詳細は【表1】の通りである。

1. 本学が担う4つの社会的使命「教育」「研究」「実践」「県民の健康を長期にわたって見守る」について、各教員が具体的な行動目標をたてて活動を行う。
2. 各教員の行動目標達成に向けて、「レジリエンス」「アライアンス」を意識する。
3. これまで行ってきた自己の活動を振り返る際に、「誰のためのものか」「何のためのものか」を意識する。
4. 1年の活動を通して、臨床現場の現状と、社会の要請、本大学の社会的使命を踏まえつつ、基礎看護学部門として将来にわたって取り組む短期目標および長期目標を定める。

【表1：2021年度の活動評価】

**1. 本学が担う4つの社会的使命「教育」「研究」「実践」「県民の健康を長年にわたって見守る」について、各教員が具体的な行動目標をたてて活動を行う。**

- 4つの使命の中でも、特に「研究」に関して、基礎看護学部門の全教員が時間と労力をかけて取り組むことができた。その成果として、すでに科研費を獲得されている教員に加え、全教員の科研費申請が達成できたこと、看護学部共同研究事業に2名の教員が申請を行えたこと、博士後期課程に教員1名の進学が決定したことなどがあげられる。その他、附属病院看護部との共同研究、修士課程1年目の課題に教員1名が取り組んでいる。教員それぞれに、様々な葛藤はあったことと思うが、公立大学の教員として、日常業務の中に研究活動を組み込む努力は今後も継続していきたい。「教育」については、本部門には長きに渡り継続してきた蓄積があり、外部から来た筆者から見れば、“伝統”“歴史”と呼べる活動も、先駆的な取り組みもある。しかし、そのような活動を行っている担当者にそのような意識がないのは大変惜しいことである。今後は、実践している教育全般の評価を行いつつ、定番教材の作成に取り組んでいきたい。「看護実践」「社会貢献」については、新型コロナウイルスワクチン接種、軽症者宿泊施設での活動、福島県看護協会での活動、臨床検査技師の技術研修への協力、出前授業、学外の委員会委員などに、それぞれ取り組んできた。今後は、それぞれの教員の専門性を活かし、他者の役に立てることに喜びを感じられるような風土をつくっていきたい。

**2. 各教員の行動目標達成に向けて、「レジリエンス」「アライアンス」を意識する。**

- 「レジリエンス」とは、困難な状況・危機的な状況で持ちこたえる力、回復できる力、「アライアンス」とは、お互いの利益を上げるために協力し合える力、と考えると、本部門は1名欠員の状況で、2022年度は、2021年度よりもむしろ様々な活動を拡大する方向で全教員が努力できていることは、この2つの力を発揮できたことによる影響が大きいと考える。複数の人が集まれば、価値観も考え方もそれぞれ一致しないところがあるのは当たり前のことと考え、主張するだけでなく、時には譲歩し、また、叱咤激励するだけでなく、時には甘えを許し合いつつ、結果的に目標達成に向かえるような組織をつくっていきたい。

**3. これまで行ってきた自己の活動を振り返る際に、「誰のためのものか」「何のためのものか」を意識する。**

- 人には本能的に、「自分のために」という意識が強く働いてしまうことから、常に「看護の受け手」を中心に、「学生」「看護学部・福島県立医科大学」「看護学」のためにと、自分以外の他者を意識することは今後も必要であると考え。活動目標1の4つの社会的使命を考える上でも、各教員の行動目標を考える際も、お互いに意識し合えるようにしていきたい。

**4. 1年の活動を通して、臨床現場の現状と、社会の要請、本大学の社会的使命を踏まえつつ、基礎看護学部門として将来にわたって取り組む短期目標および長期目標を定める。**

- 具体的に明文化した目標を定めることはできなかったが、何を基礎看護学部門の目標としたら良いのかについて、考える機会を持つことはできた。今後は、具体的な目標を定め、達成に向けて取り組んでいきたい。

## II. 2022年度の部門内での主な取り組み

2021年度の活動評価、および2022年度の竹之下理事長兼学長の新年度の訓示で述べられた「寄り道」「異なる価値観を受け止め、これまでの自身の殻を打ち破る」という内容を踏まえ、2022年度は、新たに3つのミーティングおよび新採用教員指導の担当者を定め、活動することを決めた。また、学外での社会活動にも積極的に取り組むことにした。詳細は【表2】の通りである。

## III. Academic English Communication for Nursing Faculty の開催について

2022年度に取り組みを始めた、「寄り道」「異なる価値観を受け止め、これまでの自身の殻を打ち破る」という内容に最も合致したのは、この Academic English Communication の開催であった。

開催のきっかけは、ある会合に参加した時に教員同士で行っていた世間話であった。筆者が「自身も含め、教員の英語力を向上させたい」と話したその場に、総合科学教育研究センター教授の後藤あや氏が同席されており、同氏の紹介で医療人育成・支援センターの Dr.

【表2：2022年度の主な取り組み一覧】

活動項目	担当教員	内容
研究ミーティング	林 紋美	7/20「科学研究費申請に向けた研究計画の検討①」 8/18「科学研究費申請に向けた研究計画の検討②」
教育ミーティング	丸山 育子	4/18「教育評価について」 担当：黒田 5/16「医学教育における CBT 導入の経緯と活用の実際－看護学教育への導入の長所と短所について－」 担当：黒田
Academic English Communication for Nursing Faculty	丸山 育子	5/30「Let's meet each other!」 講師：Dr. Maham Stanyon 6/13「Let's meet each other-food for thought!」 講師：Dr. Maham Stanyon 9/12（延期）、「Edward Hall: Hight and low context cultures」 講師：Dr. Maham Stanyon
新採用教員指導	川島 理恵	プリセプターとして須賀原助手への指導および指導の総括
主な社会活動	黒田 るみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島県看護協会専任教員養成講習会講師</li> <li>視覚障害者柔道東京国際オープントーナメント大会感染対策班ボランティア（6日間）</li> <li>日本パラスポーツ看護学会事務局兼学会誌編集委員長</li> </ul>
	佐藤 博子	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島県看護協会副会長</li> </ul>
	丸山 育子	<ul style="list-style-type: none"> <li>県北支部看護研究発表会講評</li> <li>郡山高校出前講義</li> <li>福島県看護協会学会委員会委員</li> <li>臨床検査技師タスク・シフト研修講師</li> <li>県中保健所への短期医療協力（2日間）</li> </ul>
	川島 理恵	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島県専任教員養成講習会運営会議委員</li> <li>福島県看護協会専任教員講習会研修講師</li> </ul>
	林 紋美	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島県看護協会「高校生の一日看護体験事業」講師</li> <li>臨床検査技師タスク・シフト研修講師</li> </ul>

Maham Stanyon に主旨説明に伺ったのが4月27日（水）、その後の5月30日（月）に、第1回の開催となった。筆者がまごまごしているうちに、ポスター、指導案とも Dr. Maham Stanyon から提案があった。詳細は、【表3】のとおりである。

その後、第2回まで実施し、第3回は今後開催予定である。

また、第1回の開催後、参加した教員から感想が寄せられた。その内容の抜粋は、【表4】のとおりである。

教員の感想からも、「異なる価値観を受け止め、これまでの自身の殻を打ち破る」ということは、自身を脅かす体験であることがよく伝わってくる。このような企画を成功させるには、参加者が経験を積んだ成人であればより一層、「安心」、「楽しい」、「早急に成果を求めない」、「お互いに参加しやすい雰囲気づくりを心がける」とい

うことが大切であると確認できた。企画する立場として、これらを保証することにより、新たな挑戦も継続することができ、「寄り道」「回り道」と思えることもやがては成果につながるものと今後の Vision がみえてきた。人材育成の視点を検討する上でも意義のある取り組みであったと考えている。

#### IV. 基礎看護学の専門性の追究

本学に、大学院看護学研究科修士課程が開設されたのは平成14年のことである。それから20年以上を経た令和5年4月に、「基礎看護学分野・基礎看護学」が新設されることになった。平成14年の修士課程開設当時、「基礎看護学」が専門領域として認められなかった背景には、「基礎看護学」の意味するところが看護学基礎教育

【表3：第1回 Academic English Communication for Nursing Faculty】

Session1：90分	
Aims of Session: <ul style="list-style-type: none"> <li>・ To meet nursing faculty who are interested in improving English speaking skills</li> <li>・ To generate free- flowing conversation</li> <li>・ To identify topics and goals for future sessions</li> </ul>	
Starts time	Content
16：00	Opening and Self-introductions: -Name -Hometown -Hobbies
16：15	Show and tell: Participants have 5 mins each to talk about 1-2 interesting objects that they have brought in
17：00	Ask Dr Stanyon Participants are free to ask Dr Stanyon questions (anything is OK) to get to know her better
17：15	Topic brainstorm Participants are invited to consider topics they would like to discuss/cover in the next few sessions. Ideas can be written on post-it notes and submitted anonymously
17：25	Close

【表4：第1回 Academic English Communication に参加した教員の感想】

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「英語はあまり好きでない、できれば遠ざけておきたいもの」と強い思いがありましたが、英語を知ることは、やはり世界が広がることだと改めて実感した時間でした。Maham 先生笑顔とお人柄で、この時間が楽しい時間になっているのだろうと感じました。下手な日本語の発音の英語でも優しく微笑んで聞いてくださるので、とても安心して会話する（成立していたかは分かりませんが）ことができました。</li> <li>• 話すための英語を身につけるには、やはり、実際に会話することの必要性を改めて感じました。また、外国の方と、対面で会話できることで、改めて英語が話せるようになりたいという思いや、英語に力を入れなくてはいけないと思うことができました。やはり、自分から話すのは多少緊張しますが、自分の可能性も広がるように感じました。そして、Maham 先生のお人柄がこの会において、話しやすい雰囲気を作ってくれていると、ありがたさを感じています。</li> <li>• 私は、海外旅行の経験がない、化石のような人間です。日本語さえも自由に使えないのだから、外国語など無理、無理…と、思ってきました。一方で、娘が片言英語で楽しそうに話している姿を見ると、正直、羨ましくもあり…。それでも黒田先生からの今回の提案は、私には難しいかな…とも。勉強会の初日、Maham 先生笑顔、部門の先生方の楽しそうな様子は、私の凝り固まった気持ちを少しずつほぐしてくれました。みなさま、ありがとうございました。</li> <li>• 英語は中学生の頃よりずっと苦手意識があります。いつも最も成績の悪い教科でした。しかし、Maham 先生はじめ部門の先生方のおかげで、今回のセッションはとても楽しいものでした。英語を話せるようになり、自分の世界を広げたいと思いました。また、黒田先生はアメリカで「クロッパ」と呼ばれていたというお話を伺い、完璧でなくともいいのだと、片言でも話してみようという気持ちになりました。</li> </ul>
---

課程を指す内容と重なり、学部レベルの教育との違いを明確にできなかったからであると聞いている。つまり、「Basic」あるいは「Fundamental」と表現される内容を指し、大学教員であれば誰もが修得を終えているという意味であろうと解釈している。

しかし、大学院のコースが新設される以上、その教育を担当する部門の教員が、その専門性を明確に表現できないということは許されない。そこで、まず、令和4年度現在、ホームページをもとに、看護師養成課程をもつ日本の国公立大学の大学院修士課程・博士前期課程の専攻等を調べてみた。その結果、大学院について表記のあった計90校のうち、基礎看護学に関連したコースを含んでいたのは54校、そのうち、専門領域として「基礎看護学」という表現を用いていたのは15校（17%）であった。その他、類似の専攻として「基盤看護学」「看護技術学」等が見出された。

本学の基礎看護学では、Basic、あるいはFundamentalと表現される基礎看護学との区別を意識して、Principlesとし、看護学の本質や原理・原則の追究を目指したいと考えている。このことは、F. ナイチンゲールが、「What is our one thing needful? To have high principles at the bottom of all.」<sup>1)</sup>「私たちにどうしても欠くことのできない一つのもの、それは何でしょうか？それは、全てのものの根底に不撓の原理をもつことです」<sup>2)</sup>と既に表現していることであり、筆者の学んできた基礎看護学の専門性を表している。

2021年度より、部門内の教員と「基礎看護学」の専門性について検討を重ねる中で、拠り所となったのは、「主な社会活動」を通して知り得た医療現場の状況であったり、現在、臨床で活躍されている看護職の方々の意見や思い等であった。看護学が発展し、専門分化が進められる中、臨床現場は特定行為研修、ナースプラクティショナー等、新たな名称のついた取り組みが増え、記録やチェックも増える一方であると聞く。そのような日常だからこそ、日々臨床現場で行われていることと看護の本来あるべき姿とを結びつけて考える枠組みや思考の筋道を求めている人が少なからず存在するということがあった。「日々臨床現場で行われていることと看護の本来あるべき姿とを結びつけて考える枠組みや思考の筋道」、これらをより具体的な概念として形にしていくことが、基礎看護学の専門性を追究していくことであろうと考えている。

## おわりに

8年前、筆者がある地域中核病院の教育専従看護師として勤務していた時、担当してきた3年間の院内の看護

部研修を振り返り、まとめた事があった。その中で、筆者は「教育を計画する立場として、研修に関わる『負担』を自ら引き受け、『批判』に負けない信念をもち、少数でも理解してもらえる上司や仲間がいれば、新たな教育計画は、必ず軌道に乗り、成果を上げていくと、実感しています」<sup>3)</sup>と書いた。今になって考えると、全くVisionの重要性が記されていない、だから自らの負担や批判が多かったのだと理解できるようになった。その時には、冒頭に記した薄井氏の言葉は全く思い浮かばなかった。

まもなく2022年度の振り返りを行い、2023年度の活動目標を検討する時期になる。部門の仲間が路頭に迷うことのないよう、責任者の担う重要な役割の一つとして取り組みたいと考えている。

## 【文 献】

- 1) F.Nightingale: Florence Nightingale to her Nurses, A selection from Miss Nightingale's addresses to probationers and nurses of the Nightingale School at St. Thomas' Hospital, 90, Macmillan and Co., Limited, 1914.
- 2) 湯楨ます監修, 薄井坦子, 小玉香津子他編訳: 看護婦と見習生への書簡(4), ナイチンゲール著作集第3巻, 340, 現代社, 1977.
- 3) 黒田のみ: 特集1 マンネリからの脱出! 次年度の教育計画を見直そう。入職2年目には2年間の基礎研修, 中堅以上には選択研修を導入し, 能力や意欲を引き出す, 看護のチカラ, 20(419), 25-29. 2015.